

〔講演要旨〕

酒造好適米新品種「誉富士」の育成と栽培法

宮田祐二

(静岡県農林技術研究所)

静岡県では「山田錦」を材料とした突然変異育種によって、酒造好適米新品種「誉富士」を選抜・育成した。平成10年に放射線(γ線)を種子に照射し、M1世代採種後、平成11年に約10万個体の規模で個体選抜を行い、その後は系統選抜を繰り返して、平成17年に育成を終了した。

「誉富士」は「山田錦」と同じ熟期であるが、稈長は25 cm短く、稈質も硬いために耐倒伏性が極めて強い特性を持つ。下位節間のみが特異的に短縮している点が特徴的である。収量性は「山田錦」並からやや優れ、玄米の大きさと形状は「山田錦」と酷似する。心白の発現は多く、また大きい。玄米横断面における心白の形状が線

状であるため、高度精白を行っても碎米の発生が少ない特性を持つ。耐病性は「山田錦」とほぼ同様で、各種病害に対して弱い。脱粒性は程度が難に改善されている。

平成17年度から実施した現地試作と酒造会社による試験醸造の結果では、吸水速度が速くやや操作性が劣る欠点があるものの、精製酒の酒質は良好で、今後の展開が期待されている。

「誉富士」の栽培では、植付時期を5月中下旬から6月上旬とし、植付密度をやや広めの坪当り60株程度にすることで安定した栽培が可能であった。

〔発表：第138回講演会〕

〔講演要旨〕

水稻登熟期間の高温による静岡県の白未熟粒発生要因と対策

石田義樹

(静岡県農林技術研究所)

静岡県においても地球温暖化等により水稻作の登熟期間が高温に当り(高温登熟)、胚乳の一部に白濁をもつ未熟粒(白未熟粒)が増加する傾向にある。

そこで、県内の主要作付品種についてその発生要因と対策について検討した。

2002年～2005年にかけて静岡県農林技術研究所三ヶ野圃場において、作付時期を移動させることにより遭遇する登熟温度に変化を持たせ、白未熟粒の発生程度を調査した。

県内主要品種のうち最も白未熟粒発生が多かったのが極早生品種の「ひとめぼれ」であり、次いで早生品種の「キヌヒカリ」の順であった。全国的に問題となってい

る「コシヒカリ」については、今回の試験では上記2品種を下回った。

作付時期別に各主要品種が出穂後20日間に遭遇する平均気温(2001年から2005年の平均、但し冷夏であった2003年を除く)を調査してみると、白未熟粒発生が多かった「ひとめぼれ」、「キヌヒカリ」は4月20日から6月10日植えまで27℃を上回る温度であった。

一般に出穂後20日間の平均気温が27℃を上回ると白未熟粒の発生が増加するといわれており、県内において早生品種は作付時期を移動させることによる高温登熟回避は困難であることが判明した。

〔発表：第138回講演会〕